

ビバハウス便り No.115 久方ぶりのアウトリーチ

2016年10月25日

青少年自立支援センタービバハウス 責任者 安達 俊子

現在、余市の農業は収穫の最盛期に突入した。果樹の町余市は活気に満ち溢れている。この勢い通り、ビバのモンガク農場でも春にメンバーみんなで植えたスイカやかぼちゃなどの収穫を行い、メンバーの実家に送らせて頂いた。

前号のビバハウス便り NO.114 の最後でお伝えしていた夏に道外へのアウトリーチと京都での卒業生との会の紹介を以下高崎指導員からさせていただきます。

「1年半前に「息子が大学で友達ができず、孤立し、単位も取れていない状況で自分のアパートにひきこもっている。」というご相談で、ビバにご両親が来たのが初めて、それから何度も相談に訪れ、本人の現況を事細かに教えてくれていました。ご両親の本人を思う気持ちにスタッフ一同動かされ、私が立候補し、その息子さんがいる山形県へ行かせてもらいました。

アウトリーチの前段では事前にアポを取っていく予定でしたが、うまくいくはずもなく、連絡が付かない状況で行く事になりました。電話が繋がらなかったのでいきなり本人がいるであろうアパートへ行き、チャイムを何度か鳴らすと本人が出てきました。本人は少々驚いた様子でしたが、前に電話もした経過があったのですんなり私の事を受け入れてくれました。

その日は夜ごはんには本人の食べたい中華を食べに行き、家族の事、自分の事、これからの事、今抱えている悩みなど2時間、二人で話す事が出来ました。

2日目には朝から本人の部屋の掃除をしにいき、かなり汚れていたもので2時間もかかりましたが、掃除の最中に再度色々話をする事ができ、本人がこれからどうしていきたいかを話しました。

ビバとご両親の中では、なんとかしてビバに連れてきて、集団生活の中で人とのコミュニケーションや精神的な回復をしてもらおうとの話になっていたもので、本人にそれを伝えると、「自分は現在やってみたい仕事がある。それがダメだったらビバハウスを見学しに行く」と言っていました。あれから3ヶ月が経ちましたが、お父さんの報告によるとその仕事の面接も受かり、現在仕事をしているようです。まずは一安心といったところです。

京都では私が入社した時からいた M 君とすぐに入所してきた H さん二人と会食をしました。二人ともまだ自分の道が決まっていなくて、もがいていました。しかし、久しぶりにビバの話や現在の自分の悩みなど色々なことを話す事ができ、M 君に至っては再度余市に来て、ビバのもう一つの施設の、「ステップアップハウス」で生活することが決まり、10月1日からもう生活をスタートさせています！」